

漢代政治文化の中心の転移

胡宝国 著
葭森健介 監訳・解題
城戸久枝・末崎澄香 訳

漢代の政治文化の中心地にはきわめて大きな変化があった。おおまかにみると、前漢の政治の中心は関中地区にあり、まさしくそこは戦国秦の旧地である。しかし、文化の中心は中国東部の戦国斉がかつて支配した領域にあった。後漢時代以降になると、政治の中心も、更には文化の中心も全て中原地区となる。文化史の観点から見れば、この変化は戦国の歴史の終結と新時代の到来を意味するものである。

(一)

前漢の政治と文化の中心の問題について検討する前に、まず前漢時代の地域区分の状況についてふれておく必要がある。この方面については揚雄の『方言』及び司馬遷の『史記』が後世に貴重な資料を残している。『方言』の記述によれば、以下のような結論が導き出せよう。第一点として戦国から前漢までは、各地の方言には大きな変化は起こっていなかったことがある。その理由として、この書が、例えば秦・楚・趙・魏・周・韓・鄭などの戦国の国名を大量に使用して地域区分の境界を明示しており、これらの方言区にはっきりとした戦国の痕跡があることがあげられる。そもそも揚雄はこの本を編纂した時、古書を調べた他、都に上京してきた孝廉・衛卒から各自の出身地の方言を理解することに一層の力点をおいた。孝廉・衛卒が随分以前に途絶えて久しい古代の方言に深く通じていることなど不可能であろう。従って、彼らが提供した材料はただ当時使用していた方言だけのはずである。つまり、当時彼らが使用していた方言は、戦国期の区域の特徴を表わしているといえよう。とするならば、如上の問題はただ一つの結論に帰着する。即ち、戦国から前漢までの方言は基本的に変化がないということである。第二点として、『方言』の中には一定数の標準語が記載されており、周祖謨先生の見解によれば、これらの標準語は「秦・晋地区の言葉が中心である」ということが指摘されよう⁽¹⁾。この結論は当時の時代の特徴を反映している。ある意味では前漢は戦国から時間があまり経っておらず、古くからある歴史、伝統は依然として頑強に残存していた。司馬遷が『史記』129巻「貨殖列伝」の中で楚や斉、河北の趙・魏などの土地の風俗に対して叙述している内容にも我々の目を引くものがある。それらの資料をみるに、彼らが生活した時代はまだ戦国時代の歴史の門をいくらかも踏み出していないようである。政治上では戦国時代が終結したのは秦代であるが、文化上から見ると戦国時代はまったくもってまだ終わっていないのである。しかし別の側面では、秦漢統一国家の社会生活に対する影響はすでにその端緒が現れてきている。すなわち、秦や晋の方言の多くは標

準語となっており、これはその地区が政治の中心的地位を占めていたことと相応しているのである。

戦国の文化が秦漢においてもずっと存続したという客観的事実は、私たちが当時の政治文化の中心の問題を研究してゆく上で、有用な視角を提供してくれている。

前漢の政治の中心は秦代と同じで、全て関中地区にある。これは制度の方面で現れた、いわゆる「漢は秦制を承く」といわれる特徴とまさに一致するのである。この特徴に対して、私たちは当然歴史的発展の連続性という観点から、解釈を求めるべきである。しかし、この種の解釈はあまりにも漠然としているようであり、また当時の人々の認識とは必ずしも一致するものではない。『史記』7巻「項羽本記」は以下のように述べる。

広陵の人召平ここにおいて、陳王の為に広陵^{とな}に^と衒う。未だ下す能わず。陳王敗走し秦兵のまたまさに至らんとするを聞き、乃ち江を渡りて陳王の命を^{いつお}矯り、<項>梁を拜して楚王上柱国と為して曰く、江東は已に定まる。急ぎ兵を引き西して秦を撃たんと……。

また、同書巻8「高祖本紀」には、

……項羽遂に西し、咸陽の秦の宮室を屠り焼く。過ぐる所殘破せざるはなし。秦人大いに失望す。然れども恐れて敢えて服さずんばあらざるのみ。

とあり、巻95「灌嬰伝」には、

楚騎来るもの衆し、漢王乃ち軍中の騎將と為すべき者を^も採ぶ。皆故の秦の騎士、重泉の人、李必・駱甲は騎兵に習い、今校尉為り、騎將と為すべしと推す。漢王之を拜さしめんと欲す。必・甲曰く、臣は故の秦の民なり。恐らくは軍は臣を信ぜず。臣願わくは大王の左右の騎に善き者を得てこれを^{たす}傳けん。

とある。

以上、「秦」・「秦人」・「秦民」などの諸例の中の「秦」の字の意味はすべて戦国の秦国を指すのであって我々が今日言うところの「秦漢時代」の「秦」を指すものではない。よって、秦漢時代の交替期に生きていた人々の目から見ると、所謂「秦を承く」とは、恐らく主に前の一時代の継承を指すというわけではなく、関中の戦国の秦を継承することを指して言っているのである。これはまさに上文が言うところの戦国文化が引き続き存在している結果である。秦が一つの時代を指し示す言葉となるのは、遅くとも前漢の中期のことである。『史記』巻91「黥布伝」には、「黥布は六の人なり、姓は英氏、秦の時布衣たり」とあり、同書巻96「張丞相列伝」には、「張丞相蒼は、陽武の人なり。書・律曆を好む、秦の時御史となり、柱下方書を主どる」とある。司馬遷はここで明らかに時代を区分する意味で「秦」の概念を使用している。類似している例はまだ多く、一々枚挙するにいとまない。

すなわち、秦の末期の「秦を承く」とは戦国の秦を継承する事を指すものでなければならない。この様に、「漢は秦制を承く」とは、秦という一時代を受け継ぐという問題から秦の故地という一地域の問題に転換しているのである。

劉邦は陳勝や項羽と同じように共に楚の人である。戦国の後期に秦と楚の矛盾は非常に激しかった。よって反秦戦争の最中、楚の人は主役を演ずる⁽²⁾。陳勝と項羽はみな「楚」の旗を掲げた。そして

劉邦もまた例外でなく、従って起兵した時から「沛公」と名乗った。『漢書』の巻1「高帝紀」で、孟康はこう言っている。「楚は旧と王を僭称し、其の県宰は公と為す。陳渉は楚王と為り、沛公は起ちて渉に応ず。故に楚制に従い、称して公と曰う」。その後、劉邦は「楚制に従う」ことより「秦制を承く」ことに転じたが、このことはきわめて興味深い問題である。高敏氏は秦漢の爵制を研究した際、次のように指摘した。「劉邦起義の過程で実行した賜爵制は爵名から言うと、実際には秦国・秦王朝及び東方諸国がかつて使用していた各種の旧爵名を引き続き用いており、その中でもとりわけ楚国の官爵名を用いていて、ただ単に秦制を継承しているというわけではない」、「紀元前202年に劉邦が全国を統一したあと、直ちに令を下し、全国的な範囲で秦王朝の二十等爵制を回復し、実行した」⁽³⁾。これに従って言えば、楚制が秦制に変わったということは、統一後に発生したのである。しかし、李開元氏の考証によると、劉邦はいち早く漢元年（前206）四月に漢中に入ってからほどなくして楚制を排除し、一転して秦制に従っている⁽⁴⁾。李氏の考証は十分納得しうるものである。劉邦は漢中に入って直ちに楚制を廃止し、「漢が秦制を承ける」ことはこのときを発端としている。これはまさにその時の政治形勢と関係がある。劉邦は関中より漢中に入ったとき、事実上すでに項羽とは決裂しており、この後も引き続き楚の旗じるしを掲げるのは明らかに不利であった。なぜなら項羽は楚国の旧貴族であったため、楚の地に於ける名声のもつ力は絶大であり、劉邦にはこれと対抗するすべもなく、楚制を放棄する事には必然性があった。この他、当時の形勢からいえば、劉邦が項羽ともし天下を争うつもりならば、ただ漢中の片隅に引きこもっているようではどうにもならず、再び関中を占領することによってはじめて東進の可能性が出てくるのである。そしてこの方面では、劉邦は優勢であった。まさに韓信が言うように、「大王の武関に入るや、秋毫害する所なし、秦の苛法を除き、秦の民と約すること、法三章のみ。秦の民は大王の秦に王たらんことを得るを欲せざる者なし。諸公の約において、大王はまさに関中に王たるべし、関中の民は咸なこれを知る。大王は職を失ひ漢中に入り、秦民恨まざるものなし。今大王挙げて東しすれば、三秦は檄を伝えて定むべし」⁽⁵⁾。劉邦の秦の地における吸引力は、項羽の楚の地における吸引力と同じであり、関中を奪取することは必要とされるだけでなく、可能となった。このことは彼が漢中で「楚」を捨て「秦」に従うという道歩むべきことを決定づけたのである。所謂「漢は秦制を承く」とは正にこの様な政治の背景の下で起こったのである。この問題に関して、研究者の多くは秦から漢への歴史の連続性の方面から考察している。本稿では旧説を排斥するつもりはないが、ただ重ねて強調したいのは、項羽の「楚」における存在がこの転化を生み出す直接的な原因となった点である。

劉邦は戦国の秦を以て拠り所となした。それは制度の一端に現れるばかりではない。その他の方面においても同様である。『漢書』巻39「蕭何伝」では、「漢王数ば軍を失ひ遁去す、何ぞ常に関中の卒を興し、すなわち欠を補わん」といっている。「関中の卒」とは実際は秦の民のことである。これは前に引用した「秦民」を以て「騎將」となすという事例とまさに一致している。十分な理由をもって確信しうることは、長年の戦闘を経て、劉邦の軍隊は実際に秦の人が中心となっており、この時期になると楚の人の人数はそれほど多くなっていたことである。よって、まさに「垓下の囿」の時、項羽は「四面皆楚歌なる」を聞くや、すぐに以下の問いを發せざるをえなかった。「漢は皆既に楚を得たるか。これ何ぞ楚の人の多きことか」と⁽⁶⁾。漢は秦人を以て主な支持勢力となしていた、

これは統一以降においても同様である。『漢書』28下「地理志」には、「漢の興るや六郡の良家の子を選びて羽林・期門に給す、材力を以て官となし、名将多く焉に出づ」とある。そして、顔師古がこれに注をつけて「六郡とは隴西・天水・安定・北地・上郡・西河をいう」といっている。以上のように六郡はみな戦国秦の区域にあり、六郡良家の子とは事実上まさに上文のいう「秦民」の後裔である。羽林・期門は漢廷の精鋭な部隊をなしており、「名将多く焉に出づ」といわれる。これは前漢王朝が軍事上において引き続き秦の人を重んじたことを反映している。『漢書』巻69伝末の賛には、「秦漢より已来、山東は相を出だし、山西は将を出だす、……何となれば則ち、山西は天水・隴西・安定・北地にして、処勢羌胡に迫近し、民俗戦備に修習し、勇力を高上せしめ馬に鞍し騎射す。故に秦詩に曰く、『王ここに師を興す。我が甲兵を修め、子とともに行かん』と、その風声気俗は古よりして然り、今の歌謡慷慨風流猶お存するのみ」とある。

班固は秦漢以降ずっと軍事上では秦の人を重んじて頼りにしていたという事実を知っていた。しかし、彼の「民俗は戦備に修習す」という言葉でもってすべてを理解するにはまだ不十分なようである。北方も遊牧民との境界地帯にあるのであるから、民俗の善く戦うというような土地は山西一カ所ではない。「山西は将を出す」の根本的な理由はやはり秦と前漢がどちらもこの地の軍事力に依って天下を取ったということによるのである。こうした歴史的背景は前漢が政治の中心を関中地区に置いていたという理解に対して信頼に値する史料的根拠を提供しているのである。

注意すべきことは、劉邦が建国する当初、本来は洛陽に都をおく準備をすすめてきたのだが、劉敬の提案によってはじめて一転して関中に西進したことである。『史記』巻99「劉敬伝」には、「婁敬<劉敬の本姓>説いて曰く、陛下洛陽に都するは、あに周室と比隆せんと欲せしかと。上曰く然りと。婁敬曰く、陛下の天下を取るは周室と異なれり。……しかるに成康の時に比隆せんと欲す。臣窃におもえらく、^{ひと}倅しからざるなりと。且つ秦地は山を被り河を帯ぶ。四室以て固しと為す。卒然として急あらば百万の衆具うべきなり。秦の故により、甚美膏腴の地に^よ資る。これいわゆる天府なる者なり。陛下関に入りてこれに都せば、山東乱ると雖も、秦の故地全くして有^{たも}つべきなり」と。

この段の史料を読めば、人々に以下の様な印象を与えるのは必然的である、前漢が長安に建都したのが全くの偶然であったようだ……。しかし上述の考察と結び付けるならばこの様に結論されるべきである、この提案は突然されたものではなく、もし劉邦の秦の地における長年にわたる経営がなかったならば、また、秦の民の劉邦に対する全面的な支持がなかったならば、劉敬の「秦の故に因る」という構想は決して提案できなかつたであろうし、たとえ提案できたとしても、恐らく実現することは難しかつたであろう。

上述の事をまとめてみると、具体的な政治環境の制約によって、楚の地より起ち上がった劉邦がどうしても秦を承げざるを得ず、関中の政治の中心的地位はこれによって形成されたといえる。しかし、すべての方面で秦の遺産を継承したというのもまた、現実的ではない。秦が優勢であるというのは主に軍事と制度の二つの方面である。政治方針および文化方面に於いては、漢初の秦の出身者の貢献は多くはない。新しい指導的思想は一体何処からもたらされるべきなのか？この一時期、齊人が重要な影響を及ぼしたということが看取される。

長安の建都は齊人の劉敬の提案から行われたものであり、匈奴との和親・六国の旧民を移して関中

の人々をふやすといった重要な政策もまた、彼の提案である。劉敬の他にも、斉人の蓋公が提唱した黄老学は漢初の指導的思想となったといえよう。また、斉人である主父偃が立案した「推恩」の策は、諸侯国の問題を遂に解決した。学術の上では、斉人の影響はまた非常に明らかなものがある。斉は魯と共に経学の大家が集合する地である。『史記』巻121「儒林伝」には当時の学術の源流が記述してある。『詩』をいわば、魯において則ち申培公、斉において則ち轅固生、燕において則ち韓太傅、『尚書』をいわば、済南の伏生よりし、『礼』をいわば、魯の高堂生よりし、『易』をいわば、菑川の田生よりす。『春秋』をいわば、斉魯においては胡毋生よりし、趙においては董仲舒よりす。韓太傅、董仲舒以外では、経学の大家はみな斉魯の地に集中している。その中でも最も斉の地の出身者が多い。董仲舒は趙の出身者であるが、彼が学んだところの『春秋』公羊学は趙の地で生まれた訳ではない。『漢書』巻88「儒林伝」には「宣帝即位し、衛太子の『穀梁春秋』を好むを聞き、以て丞相韋賢・長信少府夏侯勝及び侍中楽陵侯史高に問う。皆魯の人なり。穀梁子は本と魯学なり。公羊氏は乃ち斉学なり、宜しく穀梁を興すべし」とある。公羊学は斉学であり、学術の角度から見ると、董仲舒を斉の文化のグループに組み入れるべきであろう。厳密に言うと、漢の武帝の「独り儒術を尊ぶ」とは斉地の儒術を独尊したということである。以上からもわかるように、斉の文化及び当該文化の生み出した士人は政治上、学術上に於いて、極めて重要な影響を及ぼしており、「斉」の参与がなければ、前漢の歴史は私たちが現在認識しているような様相にならなかったであろう。秦漢の歴史を論及する際、研究者の多くは「漢は秦制を承く」という点を強調する。制度を論ずるならば、大体このようなことになる。しかしもし政治文化の側面から言うならば、漢は斉から継承したものが一層多く、斉地が前漢の文化の中心をなすということはまさに疑う余地もない事実である。

戦国の後期、七雄が並び立っていたと称するけれども、実際に大きな力を持っていたのは秦・楚・斉の三国だけだった。秦は六国を滅ぼし、秦の軍事力を明らかに示した。楚の地の陳勝・項羽・劉邦らが相次いで立ち上がったことにより、結局秦は滅び、またそこで楚の軍事力を誇示することになった。戦争の過程で、斉は二次的な地位に位置している。しかし、その優勢は政治文化の方面にあった。漢の初めの平和な環境の中で、斉の優勢が結局表に顕れてきた。秦・楚・斉の三国はそれぞれ別の時代に異なった方法で影響力を及ぼした。これは戦国の歴史が秦の統一による戦国時代の終結によって突然終わりを告げたものではないということを示しており、歴史の発展には容易に軽視しえない慣性が作用しているということの意味している。前漢の政治の中心と文化の中心との分離は正にこの時代的特徴によって生じたものである。

(城戸久枝)

(二)

後漢に入ると、政治文化等の中心地の情勢に重大な変化が起こった。学術文化の上で見ると、斉の地区の経学の大家は鄭玄ただ一人であるが、鄭玄の学問とこの地の学術の伝統とはまったく関係がない。『後漢書』巻35「鄭玄伝」には、

鄭玄字は康成。北海高密の人なり。八世の祖の崇は、哀帝の時に尚書僕射たり。玄少くして郷の奮夫となるも、休帰するを得て、常に学官に詣り、吏となるを樂しまず。父はしばしばこれを怒るも、禁ずる能わず。遂に太学に造りて業を受く。京兆の第五元先に師事し、始めて京氏易・公羊春秋・三統歴・九章算術に通ず。又東郡の張恭祖に従いて周官・礼記・左氏春秋・韓詩・古文尚書を受く。山東に問うに足るもの無きをもって、乃ち西して関に入り、涿郡の盧植に因りて、扶風の馬融に事う。

とある。鄭玄はまず洛陽に至って太学で学び、後にまた西行して馬融に学んだ。これは前漢の学者が齊の地におしよせて学習したと鮮明に対比される。齊学の衰微はもはや挽回できなくなっていた。皮錫瑞は『經学歴史』の「經学中衰」篇で「鄭君の徒党は天下に遍く、經学について論ずれば、小一統時代と謂うべし」と言っている。皮錫瑞はおそらく鄭玄の影響力を誇張したのだろう。『後漢書』鄭玄本伝は、ただ当時「齊魯の間は之を宗とす」と述べているだけである。後漢では古文經学が流行した。鄭玄以前の大家、例えば、馬融・杜林・賈逵はみな扶風人で、陳元は蒼梧人、鄭興・服虔は河南人、許慎は汝南人である。彼らはみな齊学とは関わりがない。『後漢書』卷79「儒林伝」には後漢の儒生が42名収録されており、その中で兗州8人、豫州9人、青州5人、司隸5人、荊州3人、益州6人、徐州2人、揚州4人である。きわめてはっきりしているのは、儒生が集中する地区は兗州・豫州であり、もとの齊の地区にはいないということである。

兗・豫の所在地は、漢から晋にかけての人の習慣によれば、一般に「中州」と呼ばれていた。彼らのいう「中州」とは、洛陽を中心に、兗州・豫州を主体とする中原地区を指す。当然これはおおよその区分だが、文化区分の角度から見ると、兗・豫に隣接する地区も中州に帰属させるべきかもしれない。地名に限って言うならば、ここでこれを照合し、逐一識別するのは不可能である。ただし、ある一つの特別な地域には注意しなければならない。それはすなわち南陽郡である。南陽の帰属問題は中州の政治・文化の理解にまでかかわってくる。以下この点をめぐって議論を展開していく。

漢晋の時期、人々は常に南陽と楚を関連づけて考えていた。たとえば、劉表の妻の蔡氏は南陽人の韓嵩を称して「楚国の望」としている⁽⁷⁾。陳寿の『三国志』では南陽人の来敏を「荆楚の名族」と称している⁽⁸⁾。この種の見解には理由がある。南陽は荊州に属しており、荊州はかつて楚の領域であった。しかし、もし我々が行政区域の制限をはずして文化による区域の角度から観察したならば、状況は違ってくる。司馬遷の「貨殖列伝」中ではまさに楚の地は「東楚」・「西楚」・「南楚」の三つの区域に分けられている。東楚は彭城以東、東海・呉・広陵を指している。西楚は沛・陳・汝南・南郡を指す。南楚は衡山・九江・江南豫章・長沙を指す。三楚の中には南陽は含まれていない。南陽に関しては、「貨殖列伝」はこのように述べている。

潁川・南陽、夏人の居なり。夏人の政は忠朴を尚び、猶お先王の遺風有り。潁川は敦愿なり。秦の末世、不軌の民を南陽に遷す。南陽は西は武関・鄖関に通じ、東南は漢・江・淮を受く。宛も亦た一都会なり。俗雑りて事を好む。業は賈多し。その任侠なるものは、潁川と交通す。故に今に至るまでこれを夏人という。

司馬遷は南陽と潁川を合わせて説明し、また、かの地を「夏人の居」と強調している。これは、南陽を楚の地区と明らかに区別していたことになる。これによって、「夏」と「楚」の区別は明白で

ある。「貨殖列伝」が「陳は楚夏の交に有り」と言っているのは、即ちその顕著な例である。このことから、南陽は文化上楚の地とは関係がなく、中州の潁川と共通の側面があることがわかる。王莽の末年、光武帝劉秀が自ら南陽に起兵した時、頼みとするところは自分の一族を除けば、まさにこの地の士人たちであった。いわゆる「雲台二十八将」中、南陽の劉禹・岑彭・賈復・馬武、潁川の王常・馮異等のように、南陽人と潁川人が大半を占めている。後漢以後、地域の中心地の情勢は若干変化した。例えば汝南は、すでに西楚の風俗を脱して潁川と緊密に結合し、中州地区にあって最も注目される地区となった⁽⁹⁾。これに付随して、南陽は単に潁川と密接な連携を継続しただけでなく、隣接している汝南とも日増しに接近していたのである。『続漢書』巻13「五行志」の記載によると、桓帝の末、河内の牟川が参内して以下のような書を奉った。「汝・潁・南陽、上は虚誉を採り、専ら威福を作す」。牟川の言葉は当時の人々が三地<汝・潁・南陽>の士人相互の関係をはつきりと意識していたことを説明するものである。政治上、南陽の士は声望の高い汝・潁の名士と同じくらのレベルを保持し、これによって士人の上層にのし上がったのである。『後漢書』巻67「党錮列伝」所載の35名の党人の指導者中、南陽出身は2名で、宗慈と岑暉である。荊州のその他の諸郡は誰も入っていない。南陽の士の行動は中州の士とより一層相似し、荊州の土着的な色彩が乏しいということがいえる。

南陽の士は学術上でも中州の士と同じ特徴をあらわすようになってきた。前漢の南陽の士は学術上何も見るべきものがない。しかし後漢では、状況が変わってきた。『後漢書』巻79「儒林伝」収録の儒生42名中、荊州は3名、すなわち汪丹・伊敏・謝該である。彼らは皆南陽人であった。学術上南陽は全国ですでに一等の地位にあったのである。『後漢書』巻52「崔駰伝附崔瑗伝」に、

瑗は文辞に高く、尤も善く書・記・箴・銘^{つく}を為る、著す所の賦・碑・銘・箴・頌・七蘇・南陽文学官志・嘆辞・移社文・悔祈・草書勢・七言、凡そ五十七篇。其の南陽文学官志は後世に称され、諸の能く文を為すものは皆自ら以えらく及ばざるなりと。

とある。崔瑗は涿郡の人で、「南陽の張衡と特に相い友とし好し」といわれる。彼が著した『南陽文学官志』は、このことと関係があると言える。この本はとうの昔に失われてしまったが、これを世間に公刊したこと自体が、とりもなおさず、後漢時代の南陽の学術文化が急速に発展したということの意味している。

後漢の太学で公式に教授されるのは相変わらず今文経学である。ただし、民間では古文経学がかえって日増しに盛んになっていた。この種の新しい気風が南陽にあったと感ずることができる。試みに『春秋左氏伝』の流行を例として説明を加えてみよう。『後漢書』巻79上「儒林伝」に「伊敏字は幼季、南陽堵陽の人なり。少くして諸生となり、初めて欧陽尚書を習い、後古文を受く。兼ねて毛詩・穀梁・左氏春秋を善くす」とある。伊敏は両漢の交替期の人で、彼の今文経学から古文経学に転向した学習経歴は、経学の発展方向を反映している。伊敏以後、古文経学、特に『左氏春秋』は南陽では終始衰えなかった。『後漢書』巻64「延篤伝」に「延篤字は叔堅、南陽犇の人なり。少くして潁川の唐溪典に従い左氏伝を受く」とある。延篤は後に南陽に帰って学校を開き、学問を教授した。『風俗通』巻9「怪神」に「謹んで按ずるに、陳国の張漢直南陽に到り、京兆尹延叔堅に従い左氏伝を読

み…」とあり、漢末に至って南陽人の『左氏伝』を学ぶ気風はさらに盛り上がった。『後漢書』79巻下「儒林伝」に「謝該字は文儀、南陽章陵の人なり。善く春秋左氏を明らかにし、世の明儒となる。門徒数百千人なり」とある。謝該と同時代の南陽人來敏もまた『左氏春秋』を好んで読んだ。『三国志』巻42「來敏伝」に「來敏字は敬達、義陽新野の人なり」とある。劉璋が入蜀したとき、「書籍を涉獵し、左氏春秋を善くす。尤も倉・雅の訓詁に精し。好んで文字を是正す」とある。本伝では來敏を義陽の人としている。義陽は実のところ南陽にあたる。『晋書』巻15「地理志」下に「武帝吳を平らぐるに及び、…南陽を分け、義陽郡を立つ」とある。陳寿の『三国志』は西晋時代に書かれたものなので、來敏を義陽人としたのである。來敏は早くに入蜀したのだが、その學術志向はやはり郷里の南陽に由来するもので、蜀地のものではない。このため当時「益部は多く今文を貴び」⁽¹⁰⁾、古文經学はさっぱり流行しなかった。

南陽と同様に、中州地区は前漢後期から後漢代に至るまで『左氏伝』を学ぶ人は少なくなかった。先に引用した「延篤伝」中の潁川の唐溪典はその一例である。このほかに、兩漢の交替期の潁川人馮異もかくのとおりで、『後漢書』巻17本伝では彼について「好んで書を読み、左氏春秋に通ず」と言っている。『後漢書』巻79下「儒林伝」に「潁容字は子嚴、陳国長平の人なり。博学多通、春秋左氏を善くす。…初平中、乱を荊州に避く。徒を聚むること千余人。…春秋左氏条例五万余言を著す」とある。『三国志』巻23「裴潜伝」注に引く『魏略』には「司隸の鍾繇は公羊を好まずして、左氏を好み、左氏を謂いて太官と為し、公羊を謂いて売餅家となす」とあり、同書巻49「士燮伝」には「燮少くして京師に游学し、潁川の劉子奇に事え、左氏春秋を治む」とある。以上、唐溪典・馮異・潁容・鍾繇・劉子奇は皆豫州人である。また、『後漢書』巻16「寇恂伝」に、寇恂が汝南太守の任にあった期間のこととして、「乃ち郷校を修め、生徒を教え、能く左氏春秋を為すものを聘き、親しく学を受けしむ」と記載されている。寇恂は上谷の人で中州の人ではない。彼は汝南にあって『左氏春秋』を学習しており、正に当地の気風の影響を受けたのであろう。『後漢書』巻35「鄭玄伝」によると、鄭玄は「東郡の張恭祖に従いて周官・礼記・左氏春秋・韓詩・古文尚書を受く」とある。張恭祖は東郡の人で兗州に属している。『三国志』巻18「李典伝」注に引く『魏書』には「典は少くして学を好み、兵事を樂しまず。乃ち師に就きて春秋左氏伝を読む」とある。李典は兗州山陽の人である。張恭祖と李典の事績は兗州地区の『左氏伝』流行の証明である。『後漢書』巻79下「儒林伝」に「服虔字は子慎…河南滎陽の人なり。…春秋左氏伝の解を作し、行われてこれ今に至る」とある。服虔は後漢の『左氏伝』研究の大家である。彼は兗・豫の人ではないが、その故郷の河南滎陽がまさに中州地区に属していたことは疑いない。

南陽で『左氏伝』が流行し、中州地区でも『左氏伝』が流行した。南陽人の延篤は潁川の唐溪典の門下に学び、陳国の張漢直もまた延篤を師となした。これらのこまごまとした歴史の断片は、兩地の学術的な一致を反映している。学術的一致と政治傾向の一致は我々をして南陽の士と中州の士のはっきりとした区別を難しくしている。このことから南陽の士は中州の士である、こう言っても差し支えないだろう。後漢の南陽は一貫して研究者に注目されてきた。これはもちろん光武帝が南陽より起ったためである。南陽は後漢の宗室の郷里である。ただし、本稿では、後漢の南陽地区の文化特性にはさらに注意する価値があると考えられる。「南陽の士も中州の士である」、この認識は極めて重要で

ある。これは私たちの荊州学派に対する理解を一定の方向に導くものである。

漢末、劉表の統治下において、荊州地域の社会は相対的に安定し、文化事業も比較的発達しており、荊州学派を形成した。これについては先学によって多く論述される場所である。大まかなところを言うと、荊州は当時の学術の中心であり、巴蜀地区、長江下流地方、北方地区の学術はみなこの影響を受けている。このほか、荊州学派はやはり漢代の経学が魏晋の玄学へ向かう変化のキーポイントであって、このポイントをはずすと、漢晋の学術の変遷を理解する方法がみえなくなってしまう。これらの結論はみな適切である。しかし、荊州学派はどこから来たのか。この点を改めて考えてみると、なお漠然としたものが残る。各地の学術の水準について論ずるならば、荊州は決して突出してはならず、中州にとってかわって全国の学術の中心となるのは不可能である。実際は荊州学派は確かに南陽の士を含む中州の士を包括して成立している。当時、北方地区は戦乱に陥り、多くの人々が南下して荊州に逃れ、「関西・兗・豫の学士の帰するもの、蓋し千もて数うる有り」という⁽¹¹⁾。劉表はこれによって学校を設立した。王粲は当時の盛況について、次のように描写している。「乃ち五業従事宋衷<哀>に命じ、新たに文学を作り、朋徒を延ぶ。…五載の間、道化大いに行わる。耆徳の故老蔡母闞等、書を負い器を荷いで遠きより至る者、三百有余人」⁽¹²⁾。王粲が言及している宋衷とは即ち宋忠、また宋仲子と称される人物である。この人物は『三国志』・『後漢書』のどちらにも伝がない。ただし『三国志』巻57「虞翻伝」注に引く「翻別伝」の中には「南陽の宋忠」の一語があり、これで宋氏が南陽人であることがわかる。彼は「五業従事」の身分をもって劉表のために荊州の学術の中心的役割を担った。宋忠のほかに重要な学者がまだいる。それは司馬徳操である。『三国志』巻42「尹默伝」に「益部は多く今文を貴び、章句を崇ばず。默はその博からざるを知り、乃ち遠く荊州に遊び、司馬徳操・宋仲子等に従い古学を受く。皆諸経史に通じ、又専ら左氏春秋を精しくす」とある。司馬徳操は潁川の人で、彼と南陽人の宋忠は共同して古文経学を教授し、その中に『左氏春秋』も含まれていた。この荊州における学問状況と前に述べたところの中州・南陽の地域が後漢時代に表してきた学術的特徴との間には明らかな継承関係が存在している。南陽の士は中州の士であるが故に、司馬徳操・宋忠が共同でとりまとめていた荊州学派は、実際は中州学派そのものなのである。中州学派が荊州に出現したことは、学術の中心が南に移ったことを示している。この問題について、唐長孺氏がかつて論述している。氏は「漢末学術中心的南移与荊州学派（漢末における学術の中心の南移と荊州学派）」の一文の中で次のように指摘している。「荊州の学校の規模と制度は郡の国学の範疇をはるかにこえており、洛陽の太学の南遷といっても差し支えない」⁽¹³⁾。唐氏が学校の角度から問題を考慮したことは十分納得しうる。しかしよく考えてみると、なお重ねて推敲すべき所がある。まず第一に、後漢の中・後期、洛陽の太学は既に学術の中心ではなく、士大夫が政治活動を行う場所となっていたことである。その次に、太学で教授されていたのはみな今文経学であったが、荊州の学校で教授されたのは、逆に基本的には古文経学であったということである。従って、必ずしも学術の中心の南移を太学の南遷とは理解しえないようである。後漢の中・後期、汝南の許慎・河南の服虔・潁川の荀爽・陳留の蔡邕等のごとき学術の大家が多く中州より出た。この時期学術の中心は実際中州にあったが、学者は未だ組織されておらず、また官学も設立されていなかったため、このことをはっきりと見極めることは容易ではない。中州学派が荊州に出現したのは、中原に戦乱が迫ったため、これは一時的な

ものである。学術の中心は最終的に中州にかえってくる。唐長孺氏は、「詭抱朴子推論南北学風の異同（抱朴子を読み、南北の学風の異同を推論する）」の中で、河南の重要性について鋭い見解を示している。氏は、「魏晋の新しい学風の興起は河南で起こった。王弼は玄学に精通し、乃ち山陽の人である。同時期の名士夏侯玄は譙郡の人である。阮籍は陳留の人、嵇康は山陽の人である。潁川の荀氏は代々経学を伝えているが、荀氏の易学は王弼と接近し、荀爽は「独だ道を言うを好み」、新学派の創設のメンバーに属した。行書法を創立した鐘繇・胡昭はともに潁川の人である。鐘会もまた名理に精練している。これらの人はみな河南の人である」と指摘している⁽⁴⁾。唐氏が説くところの「河南」はすなわち本稿の説くところの「中州」である。魏晋間の新しい学風は河南より興起した。これはまさに学術の中心が中州に帰ってきたという格好の証明である。

以上述べたところを総合すれば、南陽は荊州に属するといっても、文化的には中州の系統に属している。よって南陽の士がその期間に荊州学派に参与したのは別に突然のことではない。それは中州の学術が荊州においてそのまま継続したものである。荊州が学術の中心となったのは、ある種一時的で表面的な現象である。本当の学術の中心は漢晋時期を通じて終始変わらず中州にあった。『三国志』巻57「虞翻伝」注に引く『江表伝』で、孫策が虞翻に言ったところには、

孤昔再び寿春に至り、馬日磾に見え、及び中州の士大夫に会す。我に語るに東方の人は才多きのみ。ただ恨むらくは、学問博からざれば語議の間、及ばざる所有るのみと。孤の意猶お未だしと謂うのみ。卿は博学洽聞、故に前に卿をして一たび許に詣らしめ、朝士と交見し、以て中国の妄語兒を折らしめんと欲す。

と記載されている。中州の士大夫は学問上のうぬぼれがあり、あるいはそれはその地がちょうど学術上の先端の地位にあったからかもしれない。

中州は学術上の中心であるだけでなく、政治上の中心でもある。光武帝と南陽・潁川の士大夫は、群雄が割拠する中で最終的に勝利者となり、洛陽に都を建設した。この事実は中州地区が政治的に勃興してきたことを意味する。後漢の末年に至って、このような情勢の変化は、さらに顕著になった。数年前、私が汝・潁の名士の問題を議論した際、『後漢書』巻67「党錮列伝」を根拠にその地<汝・潁>の人物の統計をとった<註(9)論文>。そのときに、もし汝・潁のみにこだわらなければ、さらに有意義な結論に達することができただろう。35名の党錮の指導的名士の中で、豫州には陳蕃・李膺・荀爽・杜密・朱寓・范滂・蔡衍・陳翔・孔昱・蕃向がいる。兗州には王暢・夏馥・羊陟・張儉・劉表・檀敷・度尚・張邈・王考・劉儒・胡母班・秦周がいる。両州を合わせると、合計22名、もしさらに南陽の宗慈と岑晜を加えると中州の士は24名に達する。この統計の数字は、中州が士大夫の指導者の集中する地区であるということを説明している。『三国志』巻35「諸葛亮伝」注に引く『魏略』によると、

亮荊州に在り。建安の初めを以て潁川の石广元・徐元直・汝南の孟公威等と俱に游学す。…後、公威郷里を思い、北帰せんと欲す。亮これに謂いて曰く、中国は士大夫饒なり、遨游何ぞ必ずしも故郷のみならんやと。

とある。「中国は士大夫饒なり」と諸葛亮が語るところと上述の統計の数字は期せずして一致している。後漢の後期、政治の核心は士人の問題であった。士人の指導者は中州に集中しており、これは

さらに中州が政治の中心的地位にあったことを証明している。董卓の乱が勃発した後も、中州は依然として最も活力をそなえた地域であった。『三国志』巻1「武帝紀」によると、

初平元年春正月、後將軍袁術・冀州牧韓馥・豫州刺史孔伷・兗州刺史劉岱・河内太守王匡・渤海太守袁紹・陳留太守張邈・東郡太守橋瑁・山陽太守袁遺・濟北相鮑信、時を同じくして俱に兵を起す。衆は各数万、紹を推して盟主と為す。太祖奮武將軍を行う。

とある。以上の諸将の中で、曹操・袁紹・袁術・袁遺・韓馥・橋瑁はみな豫州人で、張邈・孔伷・鮑信・王匡はみな兗州人で、劉岱だけが青州人である。見てとれるのは、董卓討伐の関東連合軍のほとんどは、中州の士の指導によるものである。彼らと董卓との間の戦争は、中州地区と涼州地区の一大武力衝突だと理解できる。董卓の滅亡は、涼州地区の敗北を意味している。それ以後、中州の士の内部でまた分裂が起こった。曹操は兗・豫に割拠し、袁紹は河北に覇をとなえ、袁術は南陽を占有し、劉表は荊州を制圧した。中州の士相互間の戦争によって、統一回復の局面で最も実力を持っていたはずの中州の士は、統一を完成させるという歴史的な使命を果たすことに対して、しばらくの間力を発揮しえなかった。しかし、歴史はやはり最後に中州を選択した。中州に打ち立てられた曹魏政権は三国中で最も強大となり、曹魏の後を継いだ司馬氏政権は、まさにその基礎の上に全国統一を実現したのである。

つまり、後漢から魏晉にいたる間、中州はすでに学術の中心であり、また政治の中心であった。中州の士の活動が歴史の流れに影響を与えた。中州の士の活動をめぐっては、一連の歴史の筋書きを見ることができる。これは後漢以前の歴史とは全く異なっている。春秋戦国以来、秦・楚・斉など大国はみな中原の周囲にあった。中原は彼らの争奪の戦場だった。周辺の大国の圧力のもと、中原地区の小国はただ「朝は秦、暮は楚」という状態で、大きな発展をとげることは不可能だった。さらに歴史の方向を決定付けることも不可能であった。これは中原が勃興するためには、ある一つの条件が必要であるということを説明している。すなわちそれは、周辺の大国の消滅である。秦・前漢時期、政治的統一は実現したが、戦国の影響は依然として頑強に存在していた。だから、政治の中心は秦の故地であって、文化的に優勢を占める地は齊の故地以外にはありえなかった。後漢以後、戦国の痕跡は基本的に消失し、関中の政治的中心の地位と齊地の文化的中心の地位はすべて中州地区に移譲された。これによって、政治・文化の中心地区の転移は、ある側面から見ると戦国文化の最終的終末を宣告したことになる。

（末崎澄香）

原註

- (1) 周祖謨『方言校箋』（巴黎大学北京漢学研究所 1951）自序参照。
- (2) 田余慶「説張楚一關於“亡秦必楚”問題的探討」（『秦漢魏晉史探微』中華書局 1993 所収）参照。
- (3) 高敏「論兩漢賜爵制度的歷史演變」（『秦漢史論集』中国書画社 1982 所収）参照。

- (4) 李開元「前漢初年における軍功受益階層の成立—『高帝五年詔』を中心として」(『史学雑誌』第99編11号 1990)。
- (5) 『史記』卷92 淮陰侯列伝。
- (6) 『史記』卷7 項羽本紀。
- (7) 『三国志』卷6 劉表伝注引『傳子』。
- (8) 『三国志』卷42 来敏伝。
- (9) 拙稿「漢秦之際的汝穎名士」(『歴史研究』1991年第5期) 参照。
- (10) 『三国志』卷42 尹默伝。
- (11) 『後漢書』卷74 劉表伝。
- (12) 『芸文類聚』卷38 礼部上引王粲『荊州文学記官志』。なお「記」の字は衍字と思われる。
- (13) 唐長孺「漢末學術中心的南移与荊州学派」(谷川道雄編『日中国際共同研究 地域社会在六朝政治文化上所起的作用』1989所収) 139頁。
- (14) 唐長孺『魏晋南北朝史論叢』(三聯書店 1955) 362頁。

解題

胡宝国氏は1957年生まれ。父は中国封建制研究・唐代史研究者として世界的に知られる胡如雷氏である。氏は河北師範学院歴史系卒業後、北京大学の大学院に進学され、そこで周一良氏に師事した。修了後、1984年に北京大学歴史系講師となり、1989年には中国社会科学院歴史研究所に転任、現在同研究所秦漢室の副研究員の職にある。余談になるが、氏によれば、尊父胡如雷氏が周先生の最初の指導生、奇しくも自分が最後の指導生という縁で結ばれているとのことである。氏は歴史を研究するに当たって、尊父胡如雷氏から幅広い視点から歴史の流れをつかむこと、外国との比較という視点を忘れないことを、また恩師周一良氏からは文化史の重要性を学んだという。氏の研究分野は秦漢から魏晋南北朝に至る政治・文化の問題であるが、氏の研究傾向にも両氏の影響が所々にかいま見られるように思われる。

氏は1997年1月、徳島大学国際教育研究交流資金により、徳島大学総合科学部の葭森との共同研究のため来日、4月までの3ヶ月間徳島大学に滞在された。大阪市立大学の中村圭爾氏の御尽力の結果、その成果の一部を同年3月大阪で開かれた中国古代史研究会の席で発表していただく機会を得た。本論文はその際の発表原稿を胡氏自身が補筆、修正し、徳島大学総合科学部のアジア史研究室の責任において翻訳したものである。

漢帝国における地域性問題は鶴間和幸氏をはじめとする日本の研究者によって注目されてきた(『秦漢帝国へのアプローチ』山川出版社、1996等参照)。また、関中(旧秦)と関東(旧東方六国)との関係については行政制度の側面から、大櫛敦弘氏が一連の研究を行っている(「関中・三輔・関西—関所と秦漢統一国家—」『海南史学』35号、1997等参照)。漢代史の門外漢の訳者には的確な判断はしかねるが、胡氏の諸論点はこうした漢帝国の地域研究の問題とも密接に関係しているように思われる。胡氏の論文の特長は、この地域性という問題を政治と文化という二方面から分析を加えたこと、またその

中心の移動という視点をおいたこと、その変化を漢代から三国に至る長い時間の幅で追ったことにある。すなわち、漢帝国の軸足がどこの地域におかれ、時間と共にどのように変化してきたのか、文化的にみて漢帝国にはどのような地域的特徴があったかについて示唆に富む見解が含まれている。さらに、後漢の「中州」の範囲、その地の学術、政治の優越性については、魏晉貴族制社会の基盤の形成を考える上で重要な視点が含まれる。魏晉貴族制の形成については、魏晉貴族制の淵源が華北を中心とする郷論の盛り上がりにあるとする故川勝義雄氏の研究が日本の学界において大きな影響力を持っている（葭森「中国史における貴族制研究に関する覚書」『名古屋大学東洋史研究報告』7号、1981参照）。しかし、華北を中心とする士大夫相互のネットワークの形成過程、彼らの文化的なヘゲモニーの確立課程についての具体像は今ひとつ明確になっていないように思われる。そうした点においても胡氏の指摘は考慮すべきであろう。さらに、南陽を核とする荊州地域の学問を中州の範囲に含めて考えるという点は、荊州士人を多く含む蜀政権の成立基盤を考える上でも示唆に富む見解といえよう。

ただ、日本において地域研究という場合の「地域」と本稿で胡氏が使う「地区」「区域」（原文表記）との間にはその定義において必ずしも一致しないところもある（地域の概念については葭森「中国史における「社会」と「人間」の把握をめぐって」『中国—社会と文化—』7号、1992等参照）。また、胡氏は訳者に対し、その流れを概観する所に力点を置いたため、細部において説明不足の箇所もあっておられた。しかし、本稿に示された見解が古代史研究会で公にされた際、氏の独創的な意見に対し、出席者から様々な質問が出され、議論が盛り上がった。終了後、葭森のもとに当日出席していた一部の方からその講演原稿を翻訳して、日本の学会に対して紹介してはどうかとの意見が寄せられた。こうした経緯からみても、本稿を翻訳しておくことは、今後の日中学術交流の出発点として有意義であると思われる。そこで、胡宝国氏に本論文の公開をお願いし、翻訳について承諾いただいた次第である。翻訳に当たっては徳島大学総合科学部4年生城戸久枝が（一）を、徳島県立城西高校教諭末崎澄香が（二）を担当し、葭森が訳文を校訂し、解題をつけた。なお、<>で示した部分は訳者が補ったものである。

（葭森健介）